発掘ニュース 119

御所東の「かみぎゅうくん」

http://www.kyoto-arc.or.jp
（公財）京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

牛形土製品

この可愛らしい牛さん達、思わず撫（な）でてみたくなりますね。これは「型おこし」という技法で作られた牛形土製品で、ツノ以外、中は空洞です。体部と頭部は別々で作られ、粘土が乾く前に頭部を体部に嵌め込んでいます。大きさは、大きい牛２頭が高さ約 37cm、長さ約 74cm、幅約 39cm で、小さい牛が高さ 20cm、長さ 47cm、幅 20cm です。大きい牛２頭は細部に多少違いがありますが、ほぼ同じ形状ですので、同じ型から作られたのでしょう。表面を観察してみると、背中には白い胡粉（ごふん）の跡、耳と鼻には赤色、蹄（ひづめ）には青色が残っていました。元は全体に彩色が施されていたようです。

この牛形土製品は、京都市上京区河原町通丸太町北西角の発掘調査で見つかりました。ここには以前、京都市立春日小学校がありました。その春日校も 1995 年に御所南小学校へと統合され、創立 126 年の校史を閉じたのです。ところが近年、その跡地にあらたに御所東小学校が建設されることになりました。この地は「寺町旧域」という遺跡に当たっているため、2015 年、校舎建設予定地の発掘調査を実施しました。

「寺町旧域」は豊臣秀吉の京都大改造の一環で造り出された寺院街です。京都の周囲に御土居を築造、洛中に散在する寺院を「寺の内」や「寺町」に強制移転させました。「寺町」は、東が御土居、西が寺町通、北は出雲路橋、南は五条通の南あたりまでの区域となります。

文献史料から見ると、江戸時代初期には、当地には教安寺・生蓮寺・専稱寺（せんしょう）（いずれも浄土宗）がありました。これらの寺院が宝永５年（1708）の宝永の大火で罹災、それを機に鴨東へ移転させられ、その

後、公家である高辻家が屋敷を構えた、ということがわかりました。高辻家は菅原道真の子孫で、代々天皇の侍読（じどく）を務めており、江戸時代の家禄は200石、家紋は梅鉢文です。明治維新の折、天皇の東幸に伴い、東京に移り住んでいます。

発掘調査では、運動場の整地層の下から、赤く焼けた地面や焼け焦げた遺物がぎっしり詰まった遺構が見つかりました。元治の大火（1864）跡です。幕末動乱期、禁門の変（蛤御門の変）によって起こった火災で、井戸や建物の柱跡、溝までも火災ごみで埋められていました。検出した遺構には、透水桝・蔵・庭園・浴室などがあります。雨水を集めて地下に浸透させる浸透桝は、丸瓦五枚を縦向けに組み、梅の花のように見える細工があり、庭園に造られた漆喰製の池には飛び石や魚溜まり、水落ちなどの意匠が凝らされていました。出土した遺物には、土師器皿、輸入陶磁器や菊の御紋の入った染付磁器、梅花形の透かしのある火鉢、水滴や硯などの文房具、梅鉢文の入った大型の鬼瓦などがありました。

冒頭の牛さん達もこの時期のもので、大型の石組井戸から出土しました。井戸の深さは３ｍで、底部には直径１ｍの円形木枠痕跡がありました。周囲は大きな庭石のような石で囲われ、最下段は花崗岩の切石を縦積みにしています。天明の大火（1788）後に作られ、元治の大火による火災処理の際に埋められています。

寛保元年（1741）以降の絵図には、調査地には「高辻」の文字が記され、

牛形土製品が出土した井戸

井戸から出土した土器類

幕末の絵図では、「高辻」の他に「天神」の文字と鳥居の絵が描かれています。この鳥居は新椹木（さわらぎ）町通の北の突き当たりとなります。

『京都坊目誌』には、「因に云ふ元高辻邸内に天満宮の祠ありて菅神を祭る。学校となるに及び社殿を下御霊神社境内に移す。其後高辻子爵家より神霊を迎へ東京に遷す。」とあります。

この牛形土製品は元治の大火で埋められしまったとは言え、絵図にある「天神」に配置されていたことは間違いないでしょう。

上京の公家屋敷にいた牛さん達、まさしく、上京区のキャラクター「かみぎゅうくん」を彷彿（ほうふつ）とさせます。今後も御所東のかみぎゅうくんとしての活躍を期待しましょう。

（モンペティ恭代）

上京区のマスコットキャラクター
「かみぎゅうくん」